
空の君と

青芽野 雫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空の君と

【コード】

N9854X

【作者名】

青芽野 雫

【あらすじ】

空っぽ“だった”空の瞳をもつ少女と、空っぽに“なった”少年との日常を描く。

2人は“綺麗”を探し、歌を歌い、共に支え合って暮らす。

基本ほのぼのときどきシリアス。

そんな連作短編小説。

「君の瞳は、澄んだ綺麗な青だね」

そう言つて、あなたはいつも微笑むのだ。

私は、あなたのその邪気のない微笑みこそが美しいと思うのだが。

「さあ、起きて。今日は朝から森に行こうか。」

まだ朦朧とする意識の中、ぼーっと、あなたの顔を見ている。

すると、急に私の手を掴み、

「ぼーらっ！」

と、引つ張り起こされる。

窓から差し込む光は眩しくて、でも、何もかも金色に輝かせるその光を、美しいと、そう思う。

私が引つ張りあげられて、ベッドに座つたままその光をぼーっと浴びていると、

「……僕はさ、あんまり好きじゃないんだ、朝日って。」

あなたが、悲しそうな顔でそういうから、私は聞く。

「……なんで？」

「眩しすぎて、他の物は何も見えないじゃないか。ちゃんとそこにあるのに、みんな自分の色を持っているのに。」

こういうあなたを、私は優しいと思う。

「太陽っていう主役の前では、周りの物は引き立て役にしか、なれないから。」

そう言っているあなたも、気づいていないだけで、きっと、心の中でこう考えてるんじゃないかな。

「……あなたにとつては」

朝日が私達を照らす。

「ん？」

私にとっても、きつとそう。

「……あなたにとって、私は、引き立て役でしかないの？」
だから、私は微笑んであなたにこう尋ねる。

「……………」

あなたは、悲しそうな表情から、段々と微笑んで、こう言った。

「考えが変わったよ。やっぱり、朝日は好きだ。」

「ありがとう」

私は、あなたに、あなたがまだ見えていない、“綺麗”を見せる。
だから、あなたは、私にその笑みを見せて。

私があるあなたに一番見てほしい、あなた自身の“綺麗”を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9854x/>

空の君と

2011年10月28日03時15分発行